

福岡県小学校

校長会報

職能集団としての校長会

福岡県小学校長会 会長 渡 邊 正 則
(小郡市立のぞみが丘小学校長)



本年度、県小学校長会
長を仰せつかりました小
郡市立のぞみが丘小学校
の渡邊正則と申します。
どうぞよろしくお願いい
たします。

一昨年度末の全国一斉休校から続く新型コロナ
ナウイルス感染拡大に伴う、学校の様々な活動
に対する影響は、収まるどころか、まだまだ
予断を許さない状況となっています。そのよう
な中に於いても校長先生方は、それぞれの学校
で、子どもや職員の安全を最優先にしつつ、
「子どもたちの学びを止めない」「私たちの学
びを止めない」という強い決意をもって真摯に
取り組まれていることに心より敬意を表しま
す。

令和三年度は、一月に示された中央教育審議
会答申「令和の日本型教育」の構築のスタート
の年です。文部科学省の資料によれば「誰一人
取り残すことのないポストコロナ時代の新たな
学びの実現」と表されています。そのため教育
の質の向上の両輪となるのが、一人一台端末
を活用した授業改革と少人数指導です。また令
和四年度からは高学年の教科担任制も始まる予
定です。日本の小学校教育は大きく変わる節目
となります。

そのような中、私たちの貴重な情報交流の
場、研修の場と位置付けて準備して参りまし
た、第七十三回九小協福岡大会は、開催二ヶ月
前になっても開催県が緊急事態宣言の中にあ
り、今後の感染防止の最大の切り札とされるワ

クチン接種の状況も見通せない現状の中、校長
先生方の参集は求めず、誌上での開催とさせて
いただくことになりました。本研究大会では、
伝統あるこれまでの大会から内容を一部変更し
て、①不祥事防止②働き方改革③ICT環境④
担任持ち時数⑤教科担任制⑥特別支援教育⑦外
国語⑧若年教員⑨コロナ禍への対応の九つの視
点からの情報交流の場を新たに位置付ける予定
にしてみました。これらは、私たち校長が日常
的に抱える喫緊の課題で、各県によっても状況
に大きな違いのある内容で、その交流を楽しみ
にしていたところです。今後、本年八月以降に
配付される研究要録を基に、各県の実践やこれ
ら九つの喫緊の課題にかかわる情報が、それぞ
れの校長先生方の実践に生かされることを期待
しています。

さて、私は県小学校長会の活動に関わらせて
いただく中で、全国連合小学校長会の活動にも
参加させていただく機会を得ることができまし
た。その中で私が強く感じたことは、職能集団
である全国の校長先生が組織的に調査・研究活
動に励み、小学校教育の充実・発展に努力され
るとともに、全国的な調査研究活動をもとに教
育条件整備や、積極的な施策提言を国に対して
なされているということです。校長会という組
織の役割・意義はこういうところにあるのでは
ないかと強く感じたところです。今後もしばら
くは先行き不透明な時代が続き、これからの学
校は、従来通りの教育活動を進めていくことは
難しく、新たな学校教育の在り方を確立してい
かなければなりません。県下七百名の校長先生
方、どうぞそれぞれのすばらしい想像力とリー
ダーシップを発揮され、また、本会の職能団体
としての機能を存分に果たしていくことで様々
な課題をともに乗り越えていきたいと思えます。

発行人 福岡県小学校長会 会長 渡 邊 正 則	事務局	〒812-0053 福岡市東区箱崎2丁目52番1号
		福岡リーセントホテル1階 TEL (092) 292-2292 FAX (092) 292-2294

退任副会長挨拶

副会長退任にあたって

前副会長（福岡地区） 高口 道利

令和二年度は、これまで誰も経験したことがない特別な年度となりました。昨年二月末の突如の臨時休校から六月の再開まで、休校中の課題の準備、入学式の変更、分散登校、児童預かりなど、様々な対応に追われる日々が続きました。当然、福岡四地区の校長会も六月まではメール等のやりとりを進めるしかありませんでした。昨年度から準備を進めてきた福岡地区小学校長研究大会も中止せざるを得ない状況でした。しかし、コロナ禍における各地区や各学校での取組に関する情報を細かに共有することができたことは、これまで当たり前のように行ってきた取組の改善を図る視点を得ることにつながりました。ネットを活用したPTA総会、分散運動会、新たな修学旅行目的地の選定、リモート研修などは、次年度の活動を創造する上で大変参考になりました。

県校長会の活動に関しても、ほとんどの活動が中止となりました。しかし、このような中でも藤河会長をはじめ県小学校長会事務局や役員の先生方のご尽力により、全連小や九小協と連携し、紙上報告等ではありますが全国の取組の良さを学ぶことができました。また、令和三年度、福岡県で開催される九州地区小学校長協議会研究大会についても着実に準備が整えられて

います。次年度もコロナ禍が継続すると考えられますが、大会副主題であります「豊かな未来を創り出す子どもを育てる小学校教育を推進する学校経営」ができるよう、本年度の貴重な学びを生かし力を尽くしていく所存です。一年間ありがとうございました。

副会長退任にあたって

前副会長（北筑後地区） 井手 一彦

令和二年度、北筑後地区小学校長会長、県小学校長会副会長の役を賜りました。

そして、新年度のスタートは、長い長い休校期間の真っ只中でした。

学校は、感染防止と学校行事・教育課程等の運営に手探りの中、力量乏しい私には苦難の学校経営。皆様が最前線に立たれ学校、校長会をけん引されてきたことに心より敬意を表します。

休校期間中、校長会は、北筑後地区、県小学校長会いずれにおいても、総会、研究大会、市郡会長会、教科等研究大会など、諸活動の中止確認・連絡作業に終始しました。

判断に際しては、県小学校長会事務所長はじめ、スタッフの方のご懇切な県内情報の提供を賜り、本当に助けていただきました。

六月、ほぼ学校再開となり、子どもたちが登校すると静寂だった学校に活気が溢れ出しました。

校長会も少しずつ会議が開催可能になり、市

郡会長会などで徐々に先輩校長や仲間と会いました。そしてその笑顔に懐かしさとともに、未知の災いと共に戦う同志といった思いが湧き、前に進む勇気を与えられたことを覚えていきます。

なにごん田舎者ですので、福岡市まで足を延ばし、当時まだ都久志会館に入居中の県小学校会を久しぶりに尋ねる際も緊張しました。しかし、最前線で旗を振る藤河会長はじめ役員校長先生方からは常に元気をいただきました。

間もなく任期終了となりますが、私は改めて「校長会は同志。同志と共にある校長会」を大事に、同志諸氏の奮闘を感じつつ、自身の任務にしっかりと向き合っただけだと思えます。皆様の益々のご活躍を心よりお祈りします。

令和二年度を振り返って

前副会長（南筑後地区） 野片 敏洋

令和二年度、南筑後地区の校長会長と同時に県の副会長として県小学校長会に関わらせていただき、多くのことを学び、校長としての責務の大きさを改めて認識する一年でした。

本年度は活動が制約される中、六地区代表校長研修会や県PTA連合会との交流会等に出席させていただくことにより、県校長会の運営や活動内容を知ったり、本部役員や事務局の皆様、各地区会長の校長先生、県PTA会長や役員の方々と情報交換をしたりするなど、有意義な時間を過ごすことができました。

このような研修会や会合を通して、県小学校長会が福岡県の教育に関する様々な課題解決に向けて取り組まれていることを知り、地区校長会の運営の大切さを強く感じました。さらに、全連小、九小協関係の会合出席、事前の打ち合わせや資料の準備等、膨大な時間を使って、研修会や会合が運営されているとは、尊敬の念に堪えません。

南筑後地区では、県小学校長会研究大会の開催に向け昨年度より準備を進めてきましたが、コロナ禍のため大会は中止となってしまいました。しかし、研究紀要として県下の校長先生方に配布することができ安堵感を覚えました。これも、本部役員の皆様の支援や助言があったからだと思っています。また、藤河会長、渡邊幹事長には、七月豪雨で甚大な被害を受けた大牟田市立みなど小学校を訪問し、お見舞いをいただきました。厚くお礼を申し上げます。

最後になりましたが、今後の県小学校長会の充実・発展を願うとともに、この会を支えてくださっている事務局の皆様には感謝申し上げます。

福岡県小学校長会 副会長退任にあたって

前副会長（筑豊地区） 上野 二郎

令和二年度の一年間、筑豊地区小学校長会長の役割とともに、福岡県小学校長会副会長として、県小学校長会に関わらせていただきました。

この一年間は、どこを振り返ってみても、出てくるのは「新型コロナウイルス感染症防止対策」ばかりです。そのために、福岡県小学校長会研究大会をはじめ、九州地区小学校長協議会研究大会や全連小京都大会等たくさんの方の研究大会や研修会が中止になりました。大川市など南筑後地区の校長先生方や大分県・京都府の校長先生方が、時間を使い心を込めて準備された研修の場に、参加することができなかつたことを、本当に残念に思います。

しかしその反面、なかなか進まなかつた教育現場のICT環境整備や、リモート・VTR・オンデマインド等による研修体制づくりが、一気に進んだ一年間でもありました。六月五日の第三回地区会長研修会の折に、参加された校長先生方の学校のひとつが、リモート会議を実施することができている状況ではないことが確認され、「校長会が、一番遅れている。改善していかなければ！」と話したことが、懐かしく思い出されます。

現状を憂い続けることなく、危機管理には十分気を配りながら、前向きに実践を続けているたくさんの方の校長先生方にお会いできたことが、本年度の私の一番大きな研修成果であると思います。

多忙な中で常に先頭に立ち細やかな連絡やご指導をいただいた藤河会長をはじめ、事務所移転という大変な年にも関わらず的確な対応をしていただいた事務局の皆様にも心より感謝申し上げます。退任のあいさつとさせていただきます。ありがとうございました。

令和二年度を振り返って

前副会長（北九州地区） 原 伸 明

令和二年度、北九州地区小学校長会及び県小学校長会副会長を務めさせていただきました。それぞれの責務を果たすことへの不安もありましたが、前副会長からの引き継ぎをしっかりと行い、できる限り尽力しようと考えていた矢先、新型コロナウイルス感染症拡大により、全国一斉臨時休業のスタートとなりました。

これまで「当たり前」と思われていたことが「当たり前」ではなくなり、小学校長会においても、全国や九州、福岡県や各地区での研修会や協議会が中止となりました。各学校では、国や自治体からの通知・通達をもとに、新型コロナウイルス感染症対策を踏まえて教育課程を実施することとなりました。「三つの密」を避ける簡略化した卒業式や入学式等学校行事の精選・休業中の家庭学習等への対応。「新しい生活様式」の策定と学校再開後の教育活動の実施等、これまでにない多くの課題を解決していかねければなりません。校長として、今まで以上にリーダーとしての責任や判断力を問われる日々が続くこととなりました。

そのような中、福岡県小学校長会・藤河久美会長をはじめ、事務局幹事会・三部幹事会の皆様の御尽力のおかげで、地区小学校長会や市郡校長会において、研修事業計画書に基づいた事業内容の周知や研修等を実施することができました。大変感謝いたしております。事務局の

移転やホームページの開設等も大変だったことと思います。これからも、まだまだ大変な状況が続くとは思いますが、福岡県小学校長会の充実・発展を心から願っております。

一年間、ありがとうございました。

令和二年度を振り返って

前副会長（京築地区） 高野 淳

令和二年度、京築地区小学校長会長、県小学校長会副会長として関わらせていただきました。前地区会長からの引き継ぎの時、「全連小の総会に出席することで、教育への見方・考え方が変わるのを、楽しみにしてくださいね。」と言われました。

ところが四月は始業式・入学式が延期され三月からの臨時休校が続く、これまで学校が経験したことのない、先の見えないものとなりました。地区小学校長会長は、様々な方法で危機管理の情報を得ながら、子どもたちの安全を最優先に行動してきました。昨年度、東京オリリンピックが開催され、世界中が熱狂したであろう令和二年・・・。全連小総会は中止となり、紙面での開催となりました。内容は、「全連小速報」令和二年度No.1六月三十日号で、詳細に報告がありました。全連小の会長である喜名朝博会長からの挨拶の言葉。実際に東京会場で聞きたかったと残念でなりません。その中で「学校運営、授業の在り方についての教育観の大転換が求められている。」と述べられていました。

私が在籍している市では、GIGAスクール構想によって三月から一人一台のタブレット使用開始となりました。これまでの授業観の転換やICT活用に対応していかなければなりません。二度目の緊急事態宣言は解除されましたが、校長の責務である感染予防と体制づくりをまだまだ行っていく必要があると考えます。最後にこれまでの皆様のご支援に感謝申し上げますとともに、県小学校長会のみならずの発展を祈念いたしまして退任の挨拶とさせていただきます。

特集

新任校長として

全員参加の学校運営を目指して

筑紫野市立阿志岐小学校長 榎原 由紀子

阿志岐小学校は、筑紫野市の北東部に位置する全校児童百九十三名の学校です。学校近くには、宝満川が流れており、田園が広がる自然豊かな地域にあります。また、宝満山を仰ぎ見ることができ、農作物の生長と共に生き物など季節の移り変わりを感じることもできる、恵まれた環境にあります。

明治十二年の開校以来百四十年を超える歴史をもつ本校は、地域の方々に支えられながら教育活動を展開してきました。学校近くを流れる宝満川の環境調査や米作りを行う河川教育を始

めとして、サツマイモやジャガイモの栽培、自然観察など、年間を通して地域の方に協力をいただきたながら学習活動を行っています。

私は、本年度四月に校長として赴任しました

が、昨年度一年間教頭として本校に在籍し、子ども・地域・職員がわかる強みを生かし、学校運営に携わっていかうと決意を新たにしました。

新任校長として、最初に取り組んだのは、学校教育目標、重点目標の共有です。

本年度の重点目標は、「元気に、気持ちよく行動し、じつくり学ぶことのできる子どもの育成」「一歩前へ」取組が徹底・定着するポストコロナ禍の学校づくり」です。目標達成に向け、年度当初に目指す学校像、子ども像を職員全体で具体的に共通理解しました。そして、合い言葉「一歩前へ」を職員も子どもたちも意識して日々の活動を行っています。

次に取り組んだのは、組織的な人材育成と協働体制の構築です。本校は学級担任の半数以上が経験年数五年未満の職員です。全学年単学級のため、経験年数に関係なく、担任一人が学年の行事や校外学習等を担うこととなります。そ



【学校近くのレンゲ畑から見た校舎遠景】

ここで、ヤングリーダー研とミドルリーダー研を校務分掌組織に位置付け、それぞれの研修のねらいを明確にし、人材育成と協働体制の構築を図りました。

ヤングリーダー研は、若年の教員を中心に学級経営力や学習指導力の向上を図ります。

一方、ミドルリーダー研は、教職経験十年程度の中堅教員を中心に組織し、学校運営に関わる力の育成を目指しています。ミドルリーダー研では、重点目標達成に向けて学校の課題を洗い出し、課題解決に向けて校務分掌などに働きかけ、計画・実践・評価を行わせることで、学校運営の活性化と人材育成をねらっています。ミドルリーダーが中核となつて学校運営に関わることで、学校全体で目標の共有や共通実践が図られてきています。

コロナ禍で学校行事や学習活動が様々な制約を受ける中ですが、ポストコロナを見据え、職員が一丸となつて取り組んでいく校内の体制づくりを進めることが本年度の私の目標です。保護者や地域と連携を図りながら、全員参加の学校運営を目指して邁進していきたいと思えます。

自ら考え、

心豊かにたくましく生きる

子どもの育成

〈益影(ますかげ)の精神を受け継ぐ教育〉

久留米市立大城小学校長 三栗野 正 男

大城小学校は、全校児童二百十三名の学校で

す。筑後川の中流南北畔に位置し、校区全体が筑後川(小石原川)の堆積作用によってできた沖積層の肥沃な土地です。南部を長野用水が、中・北部を床島用水が流れ、水田を潤し、昔から米所として有名で、野菜作りも盛んです。

大城小学校の敷地内には、「益影の井」があります。昔からこの地域には、三つの名泉がありました。一つは、高良山にある御手洗の井、二つめは朝妻の井、そして三つ目がこの大城小学校にある益影の井です。このように三つの井戸があったことから、三井郡の名前がつけられました。益影の井については、言い伝えがあります。今から千五百年ほど昔より、王子(のちの天皇)の産湯として献上されたのが、益影の井の名水でした。この時以来、益影の井の水を産湯に使うと、その子は「美しく、賢く、長生きをする」と言い伝えられ、この井を大切に守ってきました。今も学校の校歌に歌われ、地域の人々は益影の井を大切に思っています。益影は、心の誇りを表している井戸です。

江戸時代、

大城校区の日

比生地区に、

柳園塾があり

ました。この

柳園塾を開い

たのは、井上

智愚・昆江父

子です。井上

智愚は、日田

の広瀬淡窓に



【益影(ますかげ)の井】

師事し、咸宜園で学びました。その後、故郷に帰り、日比生に塾を開きました。その子昆江も咸宜園に学んで塾頭にまでなりました。その後昆江も柳園塾にもどり、父と共に塾生を導きました。当時、たくさんの人々が学び、教育者や医者など明治時代に活躍した優秀な人材を多数輩出しました。この柳園塾は、学校のもととなるもので、教育への熱い思いが地域の中に受け継がれ、大城小学校でも、校歌に歌われていま

す。大城小学校の教育を考えたとき、この益影の井と柳園塾の精神は、教育の根底をなすものです。この歴史の財産を受け継ぐ子どもを育てることが大切と考えます。

特に、益影の井の言い伝えである「美しく、賢く、長生きする」ようにという願いは、本校教育の目指す子どもの姿に通じるものです。そこで、地域の人々にも大切にされている益影の願いを受け継ぐという意味から、本校の教育を益影教育としてとらえ、教育活動を推進していくこととしました。益影教育は、豊かな心や確かな学力、健やかな体を育成していくものです。さらに、久留米市教育振興プランの四つの重点項目の推進、令和三年度のスローガン「未来の学び、未来の教育へチャレンジ」、合言葉「ベクトルを合わせる」を大切にし、教職員がチーム大城として、コロナ禍の中で、タブレットを活用したGIGAスクール構想の推進を図るとともに、百四十周年記念行事より受け継がれてきている和太鼓「轍・響・飛翔」を創造し、「つくる力」「つなぐ力」「つらぬく力」

を育み、本年度の学校の重点目標「学び合い、かわり合う子どもの育成」を目指したいと思
います。

職員が「一枚岩」となる 学校経営を目指して

柳川市立蒲池小学校長 野中裕二

学校経営に当たって最も重視することは、「全職員が同じベクトルで校務運営に参画できるようにすること」である。本校では、このことを「一枚岩」という言葉で共有し、強い結束を誇る職員集団になることを目指している。言うのは簡単だが、「一枚岩」となるためには、目的共有↓相互作用↓価値創造の好循環をつくり出すことが不可欠である。そこで、新任校長としての一年間、私は、「重点目標を各教室まで届けるためのシステムの構築・機能化と定着」を最重要課題として取り組もうと考えている。

【重点目標を教室まで届けるシステム】

○三者会による方向性の確認、育成部長との事前打合せ(R・V)↓○育成二部会での計画・立案・提案(P1)↓○近接学年部会での取組の具体化・実践・評価(P2・D・C)↓○育成二部会による改善策の立案(A)
※一ヶ月に一サイクルでの実施
※育成二部：生活力向上部、学力向上部

まずは、システムの構築について、これまでの育成二部会を中心としたシステムから、育成二部会と近接学年部会の二重構造をとるシステムへと変更した。これは、若年教員の割合が大きくなる中、共通理解・共通実践をより徹底させる必要があると考えたからである。今後、校長としての方針を示しながら、教頭には組織運営の側面から、主幹教諭には教育課程経営の側面から、それぞれ指導を行うことで、システムの機能化と定着を図っていこうと考えている。

一方、職員集団が「一枚岩」となり、重点目標を達成するためには、組織運営のシステムと併せて人材育成のシステム、特に若年教員の人材育成システムを構築し、機能化と定着に努めることが必要だと考える。全体的に、学校における若年教員の割合は急激に増加している傾向にあり、本校も、学級担任の多くが若年教員である。重点目標を達成させるために、若年教員個々の授業力、学級経営力等の向上を図ることが喫緊の課題である。現在、若年教員の人材育成として取り組んでいるのは、次の二点である。

○教室訪問を基にした三者からの指導助言
(二週間に一回、放課後二十分間程度)
○若年教員サークル(ひよこの会)の実施
(一ヶ月に一回、放課後四十分間程度)

教室訪問を基にした指導助言の場では、和やかな雰囲気の中でコミュニケーションにより、職員との一体感が生まれるよさを感じている。また、若年教員サークルでは、教員同士で

刺激し合い切磋琢磨する雰囲気が生まれてきている。

今後、若年教員の課題に応じて管理職が個別に関わるサポートシステム、若年教員サークルにおいてベテラン教員との相互作用を生み出すシステム等を構築できればと考えている。

システムに「魂」を吹き込み、実動させていくのは一人一人の職員である。職員の皆さんに尊敬と感謝の気持ちを忘れずに、サポートしていくことが校長である私の役割だと考えている。

「たのしい、すすんで、みんなで」 学び合い育ち合う学校づくり

田川市立金川小学校長 加藤しのぶ

本校は、長年にわたり「学校・家庭・地域」が子育てをキーワードに協働教育活動を進めてきた学校です。就学前からの学力保障や小中連携事業の中で地域が一体となった教育活動に取り組む、教育効果を上げてきました。

金川小学校には、十五年前、教務として勤務し、さらに一昨年教頭として赴任した後、校長として本年度を迎えることとなりました。地域の方々や繋がりがながら教育活動をつくってきた経験を校長としてどのように生かしながら地域に根ざした学校づくりを行っていくのか自身の課題として取り組んでいきたいと思っています。

(一)校長として考える「魅力ある学校」
学校の教育目標の達成に向けて教職員が一貫

したイメージを共有できるように、意図的・計画的に展開する教育活動に「たのしい、すすんで、みんなで」があることをキーワードとして示しました。これから十数年後に子どもたちが社会に出たとき「主体性、多様性、協働性」が大変重要になると考えたからです。「仲間と、家族と、地域と、社会の人と」「色々な方法で」「楽しく進んで」解決する子どもたちが育つ学校をつくるのができたらどんなに素晴らしいだろうと思います。私達、教職員の「たのしい、すすんで、みんなで」を実現させることも重要です。

(二) 誰一人取り残さない学力向上・学力保障
金川小学校では、学力向上と学力保障の観点から学力を捉え、誰一人取り残さない授業づくりに学校全体で取り組んでいます。その取組は、一九九〇年から大阪大学教授池田寛先生や志水宏吉先生からの指導のもと「低学力克服」

「肯定的セルフイメージの育成」「家庭・地域の教育力育成」に取り組んできた経緯があります。低学年での習熟度別指導やデータを重視した学力向上の取組がこれまでの



【地域の方とサツマイモ植えの様子】

土台となり、金川小学校に根付いた授業づくりを生かされています。

また、昨年度から田川市学力向上検証校としての指定を受け、陰山英男先生の指導のもと「徹底反復指導、集中速習指導」により、基礎学力の定着と主体的に学びに向かう力の育成を図ってきました。本年度は、更に、個々の児童の学びを保障する「リカバリー」を重視した取組を学校全体で取り組んで行くようにしています。

(三) 学校・家庭・地域の協働体制について
コロナ禍にあつて、本校の強みである地域コミュニティとしての取組がなかなか行えない状況になっています。

本年度は、感染対策を講じながら子どもたちが地域の「ひと・もの・こと」に出会い、自己の生き方につなげていけるような教育活動を工夫していきたいと思っております。また、地域の方からしてもらうだけではなく、その学びを地域に還元したり、子どもたち自らが地域に貢献したりしていけるような双方向の活動にしていくことも重要です。子どもたちが地域の中で育ち、地域を大きく羽ばたいていけるような教育活動を展開していきたいと思っております。

変化に対応する学校づくり

鞍手町立剣南小学校長 吉 柳 義 雄

本校は、校区に九州自動車道「鞍手インターチェンジ」、JR福北ゆたか線「鞍手駅」

が位置する鞍手町の玄関口にあたります。歴史は古く、明治七年に創立され、全校児童は二百四十六名の学校です。

私は、昨年度まで隣の鞍手中学校で教頭としており、本年度、新任校長として着任しました。中学校の勤務経験しかない私にとって、最初は戸惑いと驚きの連続でした。頭では理解していたとはいえ、小学校の先生は朝教室に上がれば、降りてくるのは夕方、子どもたちにつきつきりで指導されています。基本的に話ができる時間は、放課後しかありません。

さて、このような私が本校の校長として赴任した理由は何なのかを最初に考えました。「校長として自分の強みとは何なのか」ということです。

ひとつは、小学校での勤務経験がないということは、小学校全体を新鮮な視点で見ることができることです。「当たり前」をベストなのか、改善点はないのかという視点で見たり、考えたりしました。

しかし、変えるには職員
の「納得」の上で変えなければ意味がありません。

「中学校ではこのやり方だったので変えてください」では、誰も



【剣南小学校「正面玄関」】

「納得」しません。変えることのメリットをきちんと説明する必要があります。職員と話をするなかで変えることのデメリットを指摘されることもありました。もちろん、どちらが大きなかを真摯に議論しました。

私は、この話し合いを通して、去年のやり方を漫然と続ける学校から「時代の変化に対応するために変化を恐れない学校」をつくっていきたいと思いました。

ふたつは、鞍手町内で二十年以上の勤務経験があり、保護者の中には多くの教え子がいることです。朝街頭に立っているとわざわざ車を停めて、「先生、〇年生に息子がおるけ、たのむばい。」と声を掛けてくれます。

本校は昨年度からコミュニティスクールを導入しています。コロナ後の日常が戻ってきた時には、保護者のみならず、地域全体を巻き込んでコミュニティスクールを推進していきたいと考えています。

最後に本校のスローガンを紹介します。

「つ」強い心と体

「る」ルールを守る

「ぎ」ぎょうぎよく

「みなみ」みんな仲良く認め合う

四つのスローガンは「剛健」「自律」「礼儀」「協調」に価値付けすることができます。

「協調」に価値付けすることができます。

価値付けすることにより、本校の目指す子ども像を共有しました。共通のゴールを示すことで、その達成のために全職員が「チーム南小」として取り組むことが重要です。私は校長として先頭に立ち、頑張っていくきます。

「地域に支えられ、子どもが 主役の学校」を目指して

豊前市立角田小学校長 藤井智文

角田小学校は、豊前市の北東部に位置する角田地区、及び、角田川の西側山麓の急斜面に4kmにわたって带状からなる畑地区を校区としています。山あり、谷あり、周防灘に面した海岸までと緑と自然環境に恵まれ、明治六年開校以来百四十八年の歴史ある学校です。校区には、伝統として受け継がれてきた行事や史跡などあり、これらは地域の方々を支えられてきました。保護者を含め校区を支えてこられた地域の方々、学校教育に対する関心が高く、とても協力的です。

私自身、本校に勤めるのは二回目です。一回目は九年前から四年間、教諭・主幹教諭として勤めました。年度初め、私を覚えていてくださった保護者や地域の方から「藤井先生、おかえり！」等の声をかけていただき、懐かしさ以上に本校に赴任できた喜びを感じています。

このように恵まれた地域の中で本年度、学校教育目標「心豊かで自ら考え、生き生きとした、たくましい子どもの育成」に向かって、六十二名の児童、七学級（特別支援学級一含）、十二名の教職員でスタートしました。

冒頭で述べたように、本地区は地域の方々に支えられています。当然本校も教育目標達成に向け、地域の方々に支えられながら教育活動を行ってきました。防災教育がその代表的な一

つです。前回勤め始めた平成二十四年度から三年間、

角田小・中学

校は福岡県重点課題研究指定・委嘱事業

として、「自

らの命を守り

抜く児童生徒

を育てる防災

教育の推進」の研究を始めました。角田小・中

学校が位置する本地区の環境を踏まえた上での

研究となり、この取組は、小中学校だけではど

うにもならず、地域（豊前市、角田地区住民、

各施設・関係機関等）の協力を得て行ってきました。

特に角田地区小中合同避難訓練や帰宅困難時の保護者への引渡訓練は、綿密な計画・関係者への説明を繰り返し、地域の支えのもと大規模に行うことができました。委嘱事業は終了し、規模は縮小しながら今年で十年目となりましたが、五月末にはさっそく引渡訓練を行いました。十年目を迎えても、地域に支えてもらいながら継続している教育活動だと改めて実感しました。

このような地域の中で、安心して子どもが活躍でき、子どもが主役として活躍できるように、より地域と深くつながっていかなくてはと考えています。「地域に支えられ、子どもが主役の学校」づくりに邁進していきます。



【豊前市立角田小学校 校舎写真】